

# 大学生の友人関係における攻撃的ユーモアの効用

## The uses of aggressive humor for the relations with their friends in college students

宮代こずゑ<sup>†</sup>, 富田茉林  
Kozue Miyashiro, Marin Tomita

<sup>†</sup>宇都宮大学  
Utsunomiya University  
miyashiro@cc.utsunomiya-u.ac.jp

### 概要

本研究では、他者とのコミュニケーションの中で攻撃的ユーモアがどのように使用されているのかについて、質問紙による検討を行った。結果より、攻撃的ユーモアはすべての使用動機において、親しくない友人よりも親しい友人に対してより多く使われること、攻撃的ユーモア使用頻度と友人得点尺度との相関の出方については、相手との関係性による違いは見られないこと、またその攻撃的ユーモアをポジティブな動機の下で用いている場合、より円滑な友人関係の構築と関連があることが示唆された。

キーワード：攻撃的ユーモア，友人関係，コミュニケーション

### 1. はじめに

ユーモアは、「おかしさ、おもしろさ」という心的現象を示すものとして定義することができる（上野，1992）。

ユーモアに関連した研究は数多くあるが、上野(1992)では、そうしたユーモア現象を6つの理論に分類した。その中の1つである優越感情の理論ではユーモアと攻撃性の関連を指摘している。その一方で、ユーモアとストレス緩和についても言及しており、ユーモアが様々な側面を持つことを示している。

また、上野（1993）は、従来のユーモア研究において、ユーモア表出の動機づけが検討されていないことを指摘した。そこで、ユーモア表出に焦点を置き、第1に「遊戯的ユーモア」、第2に「攻撃的ユーモア」、第3に「支援的ユーモア」の3つのタイプのユーモアがあるとした。第1の「遊戯的ユーモア」は、は陽気な気分、雰囲気醸し出し、自己や他者を楽しませることを動機づけとして表出される。だじゃれなどの言葉遊び、軽い冗談、ちょっとした日常の出来事など内容自体にはあまりメッセージ性のないものなどは、主に遊戯的ユーモアを生起させるユーモア刺激して利用されることが多い。このユーモアの喚起による効果としては、気分や雰囲気を明るくするため、気分転換の効

果が強い。

第2の「攻撃的ユーモア」は、他者攻撃を動機づけとして表出される。風刺、ブラックユーモア、皮肉、過激な刺激、暴力的な刺激、嘲笑、などを含み、優越感の獲得や攻撃によるカタルシスを得る効果があるとされている。

第3の「支援的ユーモア」は、自己や他者を励まし、勇気づけ、許し、心を落ち着けさせることを動機づけとして表出される。支援的ユーモアにおいては主に、自己客観視によって自己を含む状況からユーモアを見出したり、自己洞察によって得た結論の表現をユーモア刺激として提示したりすることにより、状況や自己に対する統制感をより強く得させる方法が利用される。このような洞察体験や克服感や自己客観視が伴う場合、特に困難、失敗、災難等の状況において、絶望感や動揺によって主体性を失うことを防ぎ、平静さや落ち着きへのきっかけを与える効果をもつとされている。

我々は友人との会話の中でしばしばユーモアを交えた会話を行うが、その中には相手をからかうようなもの、上記でいうところの「攻撃的ユーモア」も存在する。「攻撃的ユーモア」は相手を攻撃したり、中傷したりするという点で、ネガティブなイメージとして捉えられがちである。しかし、「攻撃的ユーモア」であっても、対話者同士の心理的な結束が強くなるに従って、“自分はあなたをからかえるほど親しみを感じている”という間接的メッセージ (metamessage) を含むため、相手に心地よさを感じさせることが指摘されている (Norrick, 1994)。

また、塚脇・越・樋口・深田（2009）はユーモアの表出される動機について検討した。この研究では、ユーモアが表出される動機を、他者の価値観、人間性、態度などを探るための動機である「関係構築動機」、他者への不満や苛立ちを伝達するための動機である「不満伝達動機」、他者との関係性を向上あるいは維持するための動機である「他者支援動機」、他者の自分に対す

る印象を操作するための動機である「印象操作動機」、自己を支援や援助するための動機である「自己支援動機」の6つに分類し検討を行っている。そして、たとえ攻撃的な形態のユーモア刺激であったとしても、他者や自己を支援するために表出されることを示した。このことから、コミュニケーション場面において「攻撃的ユーモア」が表出される動機は多岐にわたることが示唆された。これらの動機について、塚脇・越・樋口・深田（2009）は以下のように述べている。「支援的な動機に基づくユーモア刺激の表出は精神的健康にポジティブな影響を与えるという知見から推察すると、攻撃的な形態のユーモア刺激の表出であっても概に精神的健康にネガティブな影響を及ぼすのではなく、動機によってはポジティブな影響を及ぼす可能性も考えられる」。一方で、「不満伝達動機」による攻撃的ユーモアの機能については、「他者への不満や苛立ちによって高まった攻撃性を、ユーモア表出によって相手に伝達することで発散している」と論じており、他の動機による攻撃的ユーモアとは区別されるべきものと考えられる。本研究では、ユーモア表出において攻撃性を主としているものを、他者を傷つける可能性があるものとして「ネガティブな攻撃的ユーモア」、それ以外の動機によって表出される攻撃的ユーモアを「ポジティブな攻撃的ユーモア」と定義する。

「攻撃的ユーモア」は、他者を攻撃したり中傷したりするネガティブな面だけが強調されがちであり、いじめやからかいとの関連も検討されているが、本研究では他者や自己を支援したり相手との関係性をより深めるために使用される攻撃的ユーモア（＝ポジティブな攻撃的ユーモア）に着目する。ユーモアは日常生活で頻繁に観察される社会的行動であるにもかかわらず、「攻撃的ユーモア」だけに着目した研究は少ない。そこで、本研究では、大学生に焦点を当てて、特に「ポジティブな攻撃的ユーモア」がどのように他者とのコミュニケーションの中で利用されているのかについて研究することを目的とする。

## 2. 方法

### 2-1. 調査協力者

宇都宮大学生 192名（男性 73名、女性 119名、平均年齢 19.48歳、SD=1.89）であった。

### 2-2. 実施手続きと倫理的配慮

大学の講義時間を利用して調査対象者に一斉に質問紙を配布し、その場で回収した。質問紙記入には15～20分程度の時間を要した。その際、調査対象者に対して、回答は任意であること、回答を拒否したり中断したりできること、それによって不利益が生じないこと、個人が特定される形で公表や発表をしないことを紙面に明記した。また質問紙配布と同時に口頭で説明をした。

### 2-3. 調査内容

2-3-1. フェイスシート：所属、年齢、性別の記入を求めた。

2-3-2. 対人関係におけるユーモアの使用状況：ユーモアの動機項目について塚脇（2011）によって開発された尺度をもとに作成した。攻撃的ユーモア、自虐的ユーモア、遊戯的ユーモアの3種類のユーモアに対して、「相手と気が合うかをさぐるため」、「自分の不満を伝えるため」などの動機についてたずねた。具体的には、攻撃的ユーモア表出について（親和動機、印象操作動機、不満伝達動機、他者支援動機、対人探索動機を含む33項目）、自虐的ユーモア表出について（印象操作動機、他者支援動機、自己支援動機を含む35項目）、（遊戯的ユーモア表出について印象操作動機、対人探索動機、他者支援動機、自己支援動機を含む35項目）を親しく感じている友人とあまり親しく感じていない友人とに分けてそれぞれ回答を求めた。また、回答は「1. 全く用いない」から「4. よく用いる」の4件法で求めた。

2-3-3. 友人関係尺度：岡田（1995）が作成した友人関係尺度を使用し、「友達と一緒にいる時でも別々のことをしていることが多い」、「一人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする」などの21項目について「1. 全くあてはまらない」から「4. 非常にあてはまる」の4件法で回答を求めた。

## 3. 結果と考察

### 3-1. 攻撃的ユーモアについて

3-1-1. 親しく感じている友人への攻撃的ユーモア使用頻度

友人関係尺度の和を算出し合成得点とした（反転項目は置換後に足し合わせている）。また、親しく感

じている友人への攻撃的ユーモア使用頻度について、下位尺度ごと（すなわち、攻撃的ユーモアの使用動機ごと）に和を算出し、合成得点とした。使用動機は、親和動機、印象操作動機、不満伝達動機、他者支援動機、対人探索動機の5つである。各得点の基礎統計量を Table 1 として示す。

そのうえで、友人関係尺度と「親しく感じている友人への攻撃的ユーモア使用頻度」との相関分析を使用動機ごとに行った。

その結果、まず「親和動機」における攻撃的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.353, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手とより親しくなるための攻撃的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示された。また「他者支援動機」においても、攻撃的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.279, p<.001$ )。すなわち、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手を笑わせたり場を和ませたりするための攻撃的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示された。次に「対人探索動機」においても、攻撃的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.342, p<.001$ ) ことから、友人関

係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手の価値観、人間性、態度などを探るための攻撃的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示された。さらに「印象操作動機」においても友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.296, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、自分の印象を良くするための攻撃的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示唆された。

一方で、ただ不満伝達動機においてのみは、友人関係尺度得点との相関が見られなかった ( $r=.101, p=.165$ )。

### 3-1-2. 親しく感じていない友人への攻撃的ユーモア使用頻度

親しく感じていない友人における攻撃的ユーモア使用頻度について、下位尺度ごと（すなわち、攻撃的ユーモアの使用動機ごと）に和を算出し、合成得点とした。使用動機は、親和動機、印象操作動機、不満伝達動機、他者支援動機、対人探索動機の5つである。各得点の基礎統計量を Table 2 として示す。

次に、友人との関係性が攻撃的ユーモア使用頻度に及ぼす影響について検討を行う。

Table 1. 下位尺度ごとの基礎統計量.

		<i>M</i>	<i>SD</i>
親しい友人に対しての 攻撃的ユーモア使用頻度	親和動機	25.65	6.72
	印象操作動機	18.23	6.05
	不満伝達動機	12.12	3.96
	他者支援動機	8.47	2.95
	対人探索動機	9.15	2.87
友人関係尺度得点		55.36	5.17

Table 2. 下位尺度ごとの基礎統計量.

		<i>M</i>	<i>SD</i>
親しくない 友人に対しての 攻撃的ユーモア使用頻度	親和動機	16.66	7.65
	印象操作動機	13.92	5.77
	不満伝達動機	10.14	4.33
	他者支援動機	5.88	2.52
	対人探索動機	6.91	2.92
友人関係尺度得点		55.36	5.17

まず、友人との関係性によって親和動機の攻撃的ユーモア使用頻度に違いがあるかどうかを検討するため、 $t$ 検定を行った。独立変数は友人との関係性（親しい／親しくない）、従属変数は親和動機における攻撃的ユーモア使用頻度である。その結果、関係性における差が有意 ( $t(191)=17.764, p<.001$ )であり、親しく感じている友人への攻撃的ユーモア使用頻度のほうが平均値が高かった。

次に、友人との関係性によって印象操作動機の攻撃的ユーモア使用頻度を使い分けられているかどうかを検討するため、 $t$ 検定を行った。独立変数は友人との関係性（親しい／親しくない）、従属変数は印象操作動機における攻撃的ユーモア使用頻度である。その結果、関係性における差が有意 ( $t(191)=11.112, p<.001$ )であり、親しく感じている友人への攻撃的ユーモア使用頻度のほうが平均値が高かった。

友人との関係性によって、他者支援動機の攻撃的ユーモア使用頻度を使い分けられているかどうかを検討するため、 $t$ 検定を行った。独立変数は友人との関係性（親しい／親しくない）、従属変数は他者支援動機における攻撃的ユーモア使用頻度である。その結果、関係性における差が有意 ( $t(191)=13.007, p<.001$ )であり、親しく感じている友人への攻撃的ユーモア使用頻度のほうが平均値が高かった。

また、友人との関係性によって対人探索動機の攻撃的ユーモア使用頻度を使い分けられているかどうかを検討するため、 $t$ 検定を行った。独立変数は友人との関係性（親しい／親しくない）、従属変数は対人探索動機における攻撃的ユーモア使用頻度である。その結果、関係性における差が有意 ( $t(191)=11.458, p<.001$ )であり、親しく感じている友人への攻撃的ユーモア使用頻度のほうが平均値が高かった。

さらに、友人との関係性によって不満伝達動機の攻撃的ユーモア使用頻度を使い分けられているかどうかを検討するため、 $t$ 検定を行った。独立変数は友人との関係性（親しい／親しくない）、従属変数は不満伝達動機における攻撃的ユーモア使用頻度である。その結果、関係性における差が有意 ( $t(191)=6.704, p<.001$ )であり、親しく感じている友人への攻撃的ユーモア使用頻度のほうが平均値が高かった。

これらの結果から、いずれの動機においても、攻撃性ユーモアを親しい友人へ向けてより多く使っていることが明らかとなった。このことから、大学生が友人との関係性（親しい／親しくない）によって、

攻撃性ユーモアの使用を調整しているということが示唆された。

それから、これらの「親しく感じていない友人への攻撃的ユーモア使用頻度」が友人関係尺度とどのように関連しているか調べるため、使用動機ごとの相関分析を行った。

その結果、まず「親和動機」における攻撃的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.251, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手とより親しくなるための攻撃的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示された。また「他者支援動機」においても、攻撃的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.223, p<.001$ )。すなわち、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手を笑わせたり場を和ませたりするための攻撃的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示された。次に「対人探索動機」においても、攻撃的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.230, p<.001$ )。ことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手の価値観、人間性、態度などを探るための攻撃的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示された。さらに「印象操作動機」においても友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.237, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、自分の印象を良くするための攻撃的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示唆された。一方で、不満伝達動機においてのみは、友人関係尺度得点との相関が見られなかった ( $r=.095, p=.189$ )。

これらの結果は、親しい友人に対するもの（結果3-1-1）と同じ結果であった。

### 3-2.自虐的ユーモアについて

#### 3-2-1. 親しく感じている友人への自虐的ユーモア使用頻度

次に、親しく感じている友人への自虐的ユーモア使用頻度について、下位尺度ごと（すなわち、自虐的ユーモアの使用動機ごと）に和を算出し、合成得点とした。使用動機は、印象操作動機、他者支援動機、自己支援動機の3つである。そのうえで、友人

関係尺度と「親しく感じている友人への自虐的ユーモア使用頻度」との相関分析をその使用動機ごとに行った。

その結果、まず「印象操作動機」における自虐的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.448, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、自分の印象を良くするための自虐的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示唆された。また「他者支援動機」においても、自虐的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.411, p<.001$ )。すなわち、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手を笑わせたり場を和ませたりするための自虐的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示された。次に「自己支援動機」においても、自虐的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.345, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、自己を励ましたり、元気づけたりするための自虐的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示された。

### 3-2-2. 親しく感じていない友人への自虐的ユーモア使用頻度

次に、親しく感じていない友人への自虐的ユーモア使用頻度について、下位尺度ごと（すなわち、自虐的ユーモアの使用動機ごと）に和を算出し、合成得点とした。使用動機は、印象操作動機、他者支援動機、自己支援動機の3つである。そのうえで、友人関係尺度と「親しく感じていない友人への自虐的ユーモア使用頻度」との相関分析をその使用動機ごとに行った。

その結果、まず「印象操作動機」における自虐的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.355, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、自分の印象を良くするための自虐的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示唆された。また「他者支援動機」においても、自虐的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.344, p<.001$ )。すなわち、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手を笑わせたり場を和ませたりするため

の自虐的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示された。次に「自己支援動機」においても、自虐的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.200, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、自己を励ましたり、元気づけたりするための自虐的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示された。

## 3-3. 遊戯的ユーモアについて

### 3-3-1. 親しく感じている友人への遊戯的ユーモア使用頻度

次に、親しく感じている友人への遊戯的ユーモア使用頻度について、下位尺度ごと（すなわち、遊戯的ユーモアの使用動機ごと）に和を算出し、合成得点とした。使用動機は、印象操作動機、対人探索動機、他者支援動機、自己支援動機の4つである。そのうえで、友人関係尺度と「親しく感じている友人への遊戯的ユーモア使用頻度」との相関分析をその使用動機ごとに行った。

その結果、まず「印象操作動機」における遊戯的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.328, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、自分の印象を良くするための遊戯的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示唆された。また「対人探索動機」においても、遊戯的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.525, p<.001$ )。ことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手の価値観、人間性、態度などを探るための遊戯的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示された。また「他者支援動機」においても、遊戯的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.437, p<.001$ )。すなわち、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手を笑わせたり場を和ませたりするための攻撃的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示された。次に「自己支援動機」においても、遊戯的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた ( $r=.372, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、自己を励ましたり、元気づけたりす

るための遊戯的ユーモアを、親しい友人相手によりよく使うということが示された。

ここで、友人関係尺度得点と有意な相関が出た上記4つの動機と、相関がみられなかった不満伝達動機との違いについて考察を行う。前述のとおり、本研究では塚脇・越・樋口・深田(2009)の知見を元に、攻撃的ユーモアをその動機により「ポジティブな攻撃的ユーモア(親和動機, 印象操作動機, 他者支援動機, 対人探索動機)」と「ネガティブな攻撃的ユーモア(不満伝達動機)」に分けて扱っている。他者を傷つけるような動機である「不満伝達動機」のために攻撃的ユーモアを表出する頻度は、表出者の友人関係の円滑さに何ら関係ない。一方で、他者を支援したりお互いの関係性を深めたりするために表出される攻撃的ユーモアをより頻繁に使っている人は、友人関係もより円滑になっていると考えることが出来る。

上記は親しい友人に対する攻撃的ユーモア使用頻度であるが、あまり親しくない友人を想定したうえで同様のデータを取っているため、親しくない友人との間ではどのように攻撃的ユーモア使用頻度が変化するのか(そしてその頻度の変化の仕方は友人関係や社会的スキルと関係しているのか)についても引き続き調べていきたい。また、攻撃的でないユーモアについてのデータも採っているため、それらについても「相手との関係性」による使用頻度の変化や使い分けがあるかどうか(たとえば、親しい人相手には「いじる」攻撃的ユーモアも使うが初対面相手には自虐的なユーモアをより使う、など)についても次に検討を行った。

### 3-3-2. 親しく感じていない友人への遊戯的ユーモア使用頻度

次に、親しく感じていない友人への遊戯的ユーモア使用頻度について、下位尺度ごと(すなわち、遊戯的ユーモアの使用動機ごと)に和を算出し、合成得点とした。使用動機は、印象操作動機、対人探索動機、他者支援動機、自己支援動機の4つである。そのうえで、友人関係尺度と「親しく感じている友人への遊戯的ユーモア使用頻度」との相関分析をその使用動機ごとに行った。

その結果、まず「印象操作動機」における遊戯的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた( $r=.337, p<.001$ )。このことから

は、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、自分の印象を良くするための遊戯的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示唆された。また「対人探索動機」においても、遊戯的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた( $r=.411, p<.001$ )。ことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手の価値観、人間性、態度などを探るための遊戯的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示された。また「他者支援動機」においても、遊戯的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた( $r=.409, p<.001$ )。すなわち、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、相手を笑わせたり場を和ませたりするための遊戯的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示された。

次に「自己支援動機」においても、遊戯的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との有意な正の相関がみられた( $r=.319, p<.001$ )。このことから、友人関係がより円滑な人は、そうでない人と比べ、自己を励ましたり、元気づけたりするための遊戯的ユーモアを、親しく感じていない友人相手によりよく使うということが示された。

## 4. 総合考察

本研究では、「ポジティブな攻撃的ユーモア」を使う頻度は、相手との関係性(親しい/親しくない)によって変化するかどうかについて調べた。本研究の結果として、まず、相手との関係性に関わらず、ユーモア使用頻度について、友人関係性尺度得点との間に相関が見られたユーモア使用とその効用について述べる。

### 4-1. 相手との関係性(親しい/親しくない)で共通して見られた結果

攻撃的ユーモア使用頻度について、友人関係性尺度得点との間に有意な相関がみられた。相関がみられた使用動機は、親和動機、印象操作動機、他者支援動機、対人探索動機の4つである。次に、自虐的ユーモア使用頻度について、友人関係性尺度得点との間に有意な相関がみられた。相関がみられた使用動機は、印象操作動機、他者支援動機、自己支援動機の3つである。また、遊戯的ユーモア使用頻度について、友人関係性

尺度得点との間に有意な相関がみられた。相関がみられた使用動機は、印象操作動機、対人探索動機、他者支援動機、自己支援動機の4つである。

これらのことから、多くの学生がコミュニケーションの一環として、自虐的ユーモア、遊戯的ユーモアに加えて、攻撃的ユーモア、特に、「ポジティブな攻撃的ユーモア」を使用していることが分かった。また、これらのユーモアを用いることが、相手との関係性に関わらず学生間のコミュニケーションにおける有効な手立てとして利用されていることが推測できる。

一方で、不満伝達動機においては、攻撃的ユーモア使用頻度と友人関係尺度得点との間に相関はみられなかった。本研究では、先行研究の知見を元に、攻撃的ユーモアをその動機により「ポジティブな攻撃的ユーモア（親和動機、印象操作動機、他者支援動機、対人探索動機）」と「ネガティブな攻撃的ユーモア（不満伝達動機）」に分けて扱っていたが、「ネガティブな攻撃的ユーモア」は、自分の不満などを間接的に伝えることができる一方で、皮肉、からかい、嘲笑、ブラックユーモアを含んでいるため、相手との関係性の悪化に繋がりがかねない。そのため、相手との関係性に関わらず、不満伝達動機における攻撃的ユーモアの使用に相関が出なかったと考えられる。

#### 4.2. 相手との関係性（親しい／親しくない）による攻撃的ユーモア使用の違い

本研究から、すべての使用動機において、攻撃的ユーモアは親しくない友人よりも親しい友人に対してより多く使われる、という結果が得られた。

一方で、攻撃的ユーモア使用頻度と友人得点尺度との相関の出方については、使う相手との関係性による違いは見られなかった。これらのことを解釈すると、以下のことが考えられる。すなわち、親しくない友人に対しても（親しい友人に対して使うよりは少ないが）攻撃的ユーモアの使用が見られ、その攻撃的ユーモアをポジティブな動機の下で用いている場合、より円滑な友人関係の構築につながる。しかし不満伝達動機において攻撃的ユーモアが使われる場合に限っては、その攻撃的ユーモア使用は「親しくない友人」との円滑な関係を築くことに全く寄与しない。

#### 4.3. 展望

本研究では、ユーモアの表現者（情報発信者）に焦点を当てて検討を行った。ポジティブな攻撃的ユーモ

アが友人関係と関連していることが示された。また大学生自信も、普段の会話の中でこうした攻撃的ユーモアを、コミュニケーションや関係性を円滑にするため方略的に使用していることが考えられる。

しかしそうした発信者側の方略がうまく機能せず、結果としていじめやからかいになってしまう場合も多くあると考えられる。今後はこうした「ポジティブな」動機の下で発せられたユーモアが、受け手にはネガティブに捉えられてしまうという現象について、その関連要因などを探っていくことが必要である。

そのため今後は攻撃的ユーモアの受け手側についても焦点を当て、ユーモアの発信者および受け手のそれぞれの攻撃的ユーモア志向性や、発話された攻撃的ユーモアの攻撃度の高さの認知などが、コミュニケーションや対人認知、友人関係構築とどのような関連があるのかについても検討する必要があるだろう。

## 5. 文献

- [1] 上野 行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について 社会心理学研究, 7, 112-120
- [2] 上野 行良 (1993). ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他性との関係 心理学研究, 64, 247-254. [3] Norrick, N. R. (1994). Involvement and joking in conversation. *Journal of Pragmatics*, 22, 409-430.
- [4] 塚脇 涼太・越 良子・樋口 匡貴・深田 博己 (2009). なぜ人はユーモアを感じさせる言動をとるのか? — ユーモア表出動機の検討 — 心理学研究, 80, 397-404.
- [5] 塚脇 涼太 (2011). ユーモア表出の類型ごとに見た動機の構造 広島大学心理学研究, 11, 49-56.
- [6] 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363